

## 地域子育て支援拠点研修事業<大阪開催>

### 《開催概要》

- 開催日 平成25年12月15日(日) 10:00~16:30
- 会場 摂津市立コミュニティプラザ
- 主催 一般財団法人こども未来財団、NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省、(社福)全国社会福祉協議会、大阪府、摂津市、摂津市教育委員会、大阪つどいの広場ネットワーク
- 協力 NPO法人キッズぼてと
- 参加者数 192名(女性 173名・男性 19名)  
(行政 67名、NPO・任意団体 95名、その他団体・企業 27名、その他3名)

### 《プログラム》

#### ■主催者挨拶

岡本聰子さん NPO法人ふらっとスペース金剛代表理事・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

#### ■プログラム1 基調報告

##### 「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長



##### <地域子育て支援拠点について>

地域子育て支援拠点事業は、すべての子育て家庭を対象とする重要な事業である。今後の課題は、市町村における拠点事業の拡充と「利用者支援」等の充実を図ること、また専門的な人材の確保および養成をおこない、資質の向上を目指すことである。

##### <子ども・子育て支援新制度の概要>

3党合意で子ども・子育て関連3法が成立し新制度に向けて社会全体による費用の負担がおこなわれることになった(子育て分野は現在2兆円、消費税が8%になると0.3兆円プラスになる)。確保された財源は施設型給付や地域型保育給付、児童手当、地域子ども・子育て支援事業の充実のためなどにあてられる。なお、地域子ども・子育て支援事業に地域子育て支援拠点事業が入る。

地域子ども・子育て支援事業に共通な仕組みをもたせるため、市町村が主体となりニーズを把握し、各地域に合った形で事業を計画し実施する。一方、政府は、推進体制を整備し内閣府に子ども・子育て会議を設置するなどの仕組みが作られた。

##### <新制度施行までの市町村子ども・子育て支援事業計画について>

潜在的なものを含めての地域の子育て家庭のニーズを把握し、その地域にふさわしい事業や施設を計画的に整備していく。

また、地域子育て支援拠点事業とは別の独立した事業として利用者支援事業が創設された。利用者支援事業には、二つの形態があり、行政窓口以外で親子が継続的に利用できる施設で行われるものと、行政窓口等で行われるものとが想定されている。

地域子育て支援拠点事業と利用者支援事業の二つの事業を実施した場合には、ぜひ一体的な運営をしてほしい。

## ■プログラム2 パネルディスカッション

「子ども・子育て支援新制度のもとで拠点はどう変わっていくのか

～利用者支援・地域支援について考える」

【パネリスト】橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

山岡利啓さん 奈良市子ども未来部 参事

竹林悟史さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長

【コーディネーター】岡本聰子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事

橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

「子育て支援コーディネーターの役割と期待される力量について」

制度として位置づけられても、事業や担い手が担うべき機能、またその業務が明らかでなければ、事業目的の実現は困難である。これを受け「子育て支援コーディネーター」が配置されるならば、個別支援と地域支援双方を担うことが期待されている地域子育て支援拠点事業ならではの特性を生かした展開が今後望まれる。



◎子育て支援コーディネーターの役割

個別支援として・・・子育て家庭が有する課題やその力を把握、予測したうえで、本人の力や地域資源を生かしながら、個別の家庭状況に応じ、支援策を調整、調達する。

地域支援として・・・全ての子育て家庭が子どもを授かった時から、社会的に包摂される仕組みを地域の中に作ることを指向し、より包括的、予防的にコーディネートする。

◎子育て支援コーディネーターに求められる役割と期待される力量

日常的に他領域やインフォーマルな資源を含めた地域の資源とつながり、その関係を基盤としながら、継続的、横断的に家族をつなげ支えていくことが求められる。

山岡利啓さん 奈良市子ども未来部 参事

「奈良市地域子育て支援拠点事業の現状と今後の取組」

平成5年より始まった地域子育て支援拠点の設置状況について説明。平成25年現在、センター型(7か所)、ひろば型(11か所)。すべて委託事業で運営している。



奈良市では地域子育て支援拠点を増設しているが、市の財政状況もあり、依然として親子の集える場が不足しているので、平成19年より奈良市独自の親子の集える場を子育てスポットとし、現在31か所設けている。

今後は「奈良市次世代育成支援行動計画」(平成22年~26年度)では、平成26年度の子育て支援拠点設置数、事業拡充の予定、再編、機能強化型の創設について目標を定めている。「子ども・子育て支援事業計画」(平成27~31年度)へ発展的に継承していく。

◆コーディネーター岡本さんより：それぞれの地域や家庭にあわせて、包括的支援が必要。個々の団体の特性を生かして事業を展開されることを望む。

【会場からの質問に対するパネリストからの応答】

Q：コーディネーターの資格について

A：資格制ではないが、養成講座・研修を受ける必要がある（橋本先生）

Q：市の相談窓口と拠点のコーディネーターの役割の違い

A：拠点として担うべきは、親子がふだん生活している中での困りごとや悩み事に耳を傾け、一緒に考えたり、必要な関係機関につなげていくこと（橋本先生）

### ■プログラム3 分科会

<第一分科会>「求められる地域機能強化とは」

【助言者】倉石哲也さん 武庫川女子大学文学部 教授

【話題提供者】柴田恒美さん NPO 法人子育て談話室 理事長

【コーディネーター】中橋恵美子さん NPO 法人わははネット 理事長



倉石哲也さん 武庫川女子大学文学部 教授

「求められる地域機能強化とは」

地域子育て支援拠点事業にあてはまる、保護者支援の8か条を紹介。子育てひろばの『居場所』機能とは安全安心の基地であること、自律（自立）的行動が支えられること、人と人の関係が成立し承認されること、提供された役割の獲得、アイデンティティの獲得、人・場所・地域への貢献等があげられる。

次に困難家庭への対応と支援者に求められる技能について、カウンセリング技能、ソーシャルワーク技能、コーディネート技能をあげた。



カウンセリング技能とは対話を通じて自らの気付きを深め道筋が見出せるように支援すること。積極的な傾聴をいう。対話を通して家族等の関係を見抜くというような想像力を働かせること。

ソーシャルワーク技能とは、個別援助の技能（対象者の情報をどのくらい集められるか）、グループを活用し活性化させる技能、地域を取り込む技能（地域住民の力を集める、自治体との協働など）をいう。

コーディネート技能とは個別のニーズに応じて、最適な支援メニューの提供がされること、地域の環境をトータルにデザインすることがあげられる。

子育て支援ソーシャルワークは個別に働きかけるミクロ、組織内組織外に働きかけるメゾ、地域自治体等外に働きかけるマクロに分けられる。ミクロは困難ケースに個別に働きかけていく、その人のもつている長所をどう認めていくか。メゾは支援者の人間関係をどう作っていくか。マクロはメゾからの発展。誰と誰が連携していくか。難しいケースはすべての支援が必要となる。利用者、支援者、地域、自治体等、日常的に豊かなコミュニケーションを持ち、信頼関係持てるかどうかが大事になる。

子育て支援は与えすぎてはいけないがこの地域に行き届いているかどうか支援のバランスを取る必要がある。

柴田恒美さん NPO 法人子育て談話室 理事長

2000年、不登校児などの居場所「ほっとスペース」を開設後、子育て談話室を設立。ひろば、訪問型子育て支援、ファミリーサポート事業などを展開。ひろば、保健師、支援センター、地域療育センターと情報を共有し、定期的に観察し、センターと親のそれぞれの思いの違いにもお互いの信頼が構築されるまでスタッフが寄り添ったり、サークル立ち上げのバックアップや、ひきこもりがちな家庭への訪問型支援を行っている。



事例として精神的に不安定な母親と乳幼児親子のケースを紹介。家族全体の状況を把握し、ファミリーサポートや地域資源を活用し、連携して全体で家族全員を支えていった。

何年後かに会った時、にこやかに別人のような笑顔になったお母さんに会うととっても嬉しくなり、やりがいのある仕事をしていることに気づかされる。新たな出会いを楽しみにしている。

## <第2分科会> 「親子に寄り添う地域子育て支援拠点であるために ～利用者理解、受容、共感、相談について考える」

【講師】渡辺顕一郎さん 日本福祉大学子ども発達学部 教授

【コーディネーター】岡本聰子さん NPO 法人ふらっとスペース金剛 代表理事

渡辺顕一郎さん 日本福祉大学子ども発達学部 教授

### [地域子育て支援拠点事業のガイドラインについて]

約10年前、自身の子育てが大変だった時にNPO団体を設立。障がい児のデイサービスと子育てひろばを一軒家に開設した。

子育てを取りまく社会の様相について。日本の子どもは先進国中では自己肯定感が低く、自分は孤独だと思っている傾向が高い(ユニセフレポートより)。地域の社会関係が希薄になる中、子育て家庭が孤立し、親も支えを得にくくなっている。



子どもは、子ども同士の育みあいによって自己主張する能力や意志を伝える力を養い、交渉や折り合いをつける方法を自らの体験で学ぶ。それを見守る親もそこで共に成長するのであって、支援拠点のスタッフもこのことをふまえて意識して対応してもらいたい。

地域子育て支援拠点の役割とは、現代の子育ての背景をよく理解し、親の気持ちに寄り添う支援者がいること。乳幼児期の子どもの発達の基本は、基本的信頼・情緒の安定・自発性である。それを理解したうえで支援することが大事。一人ひとりのそのままの子どもを受け入れる。拠点で安心して過ごすことで情緒が落ち着き、自発性が芽生える、その結果、親を支える支援となる。

また利用者同士をつなぐことも大切。利用者同士の支え合いは専門家による支援と同じくらい重要。悩んでいるのは自分だけではないと知るだけで人は支えられる。つながりを求めてやってくる利用者へ支援者の対応が大事になる。

### [事例を使ったワーク]

事例をもとに背景と対応についてグループに分かれて話し合った。拠点でよく起こりがちな事例が与えられた。親、子、他の利用者、スタッフなど多様な視点から想像して話し合うことで、気付きが出てきた。きつく子どもを叱ってしまった母親に対しては、批判せず日々の大変さをねぎらう等、様々な意見が出された。その後、グループごとに発表を行い、他のグループの意見も共有した。



### <第3分科会>「地域子育て支援拠点における『子育て支援コーディネーター』について」

【講師】橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

【事例報告】草薙めぐみさん NPO法人子育てネットくすくす 理事長

徳谷章子さん NPO法人ハートフレンド 代表

【司会】安田典子さん NPO法人くすくす 理事長

#### [事例報告1]草薙めぐみさん NPO法人子育てネットくすくす 理事長

平成16年度より善通寺市子育て支援総合コーディネーターとしても活動中。善通寺市の子育て支援施策を紹介しながらご自身の取り組みについて話された。子育てひろばでは親子が中学校に出向き中学生と乳幼児とのふれあい体験活動(月1回)や健診センター(4ヶ月・1歳半健診)での情報提供などのアウトリーチを行っている。各保育所の園庭開放へ出向きつながりをつくり出す活動は、地域との関係性を深め、つながりを創りだすだけでなく、虐待の予防にもつながっている。また、障がいのある親たちが集う場をひろばのイベントとして相談支援専門員と連携して新たな支援をつくったり、障がいのある子どもの親支援なども含め、地域資源をつくりだす多様な取り組みを行っている。子育て支援拠点があるからこそ多様な取り組みが可能となり、様々な地域資源とのつながりが新たな可能性を広げていける。これからは枠にとらわれない子育て家庭への支援と福祉の視点での関わりが求められていく。入口は子育て支援だが出口は生活支援なんだ。コーディネーターは「利用者が主体であるということ」を貫き、決意を持って多様なニーズを持つ子育て家庭に向き合い、継続的・横断的にその家族と資源をつなげ支えていくことだと思っている。



#### [事例報告2] 徳谷章子さん NPO法人ハートフレンド 代表

乳幼児親子から高齢者までつながる町づくりをめざした活動は、子育て支援事業から始まり、子ども、中学生、おとな(高齢者の居場所づくりとしての子どもを見守るボランティアが地域資源となっていく)のてらこや、障がい児のディサービスなど多岐にわたる。ひろばでは常に利用者さんが中心であることを心がけている。ひろばデビューという言葉があることに驚いたため、スタッフが地域のイベントへ積極的に出向き、乳幼児親子に声掛けをしてひろばへ誘い気楽に来てもらえるよう努力している。ひろばで元気な親子になるだけではなく、ひろばから自宅に帰ってからの親子が元気でいられるように生活力を高められるような支援をしていきたい。また乳幼児期にひろばを利用した親子と継続的に切れ目なく子どものライフステージにそって長期的に関わっていけるよう、地域の中の大切な資源(既存組織、学校、行政、人)と日頃から顔の見える関係を作つておくことを大切にしている。今後は障がいのある子どもへの支援のためのスキルアップや、利用者と地域資源をつなぐ力、相談・連携・援助の力をつけて行きたい。



橋本真紀さん 関西学院大学教育学部 准教授

#### 【まとめとして】

1. 子育て支援は生活支援。
2. コーディネーターとして、その家族がかかえている問題をときほぐしていく。
3. 支援を受けていた人が、支援する側になる。資源になってくる大切さ。



4. コーディネーターの仕事を仕組みにしていった。
5. 切れ目のない支援。
6. 何かある前の関係作り。

子育て支援は、個別の支援から始まったとしても地域支援とつながり、生活支援に至る。顔の見える支援、支援家庭が自分の生活の場に帰った時にも元気になれるように、枠組みの中にコーディネーターを入れていってほしい。

#### ■プログラム4 全体会（分科会総括・ディスカッション）

【コーディネーター】 中橋恵美子さん NPO 法人わははネット 理事長

【パネリスト】 柴田恒美さん NPO 法人子育て談話室 理事長

徳谷章子さん NPO 法人ハートフレンド 代表

草薙めぐみさん NPO 法人子育てネットくすくす 理事長



#### ◆各分科会のキーワードを2つフリップに書いたものを発表。

柴田さん(第1分科会) 「子育てひろばの『居場所』機能」、「子育て支援 ソーシャルワークの視点」

徳谷さん(第2分科会) 「トラブルはSOSのチャンス」、「それでもようがんばってる」

草薙さん(第3分科会) 「子育て支援は“生活支援”」、「『切れ目のない支援』拠点の強み・良さをいかす」

#### ◆会場の参加者同士、近くの人と4~5人で今日の振り返りと共有を10分ほど行う。

会場より

- ・仲間に出会え、貴重な気づきを得た。
- ・行政との関係もプラスにしていこう。
- ・ひろばとして何ができるのか、どういう連携をしていけるのか、あらためて考える機会になった。
- ・子ども・子育て会議の委員になったり、傍聴もして、しっかりしていくことも大切。

#### ◆パネリストから最後に一言ずつ

柴田さん：小さな町の小さな事例を発表したが、このスタイルでやれるんだと肯定することができた。

徳谷さん：7年前はひろばを開けてるだけで精一杯。身近なひろばだからこそ相談も多くなり、いろんな機関とも必死になってつながっていった。親子が元気になるようにスキルを高めていきたい。

草薙さん：コーディネーターという肩書があることで、母子保健事業に関わることができた。予防的支援として、待っているだけでなく、自分が出向いていかないといろいろな問題は拾いあげられない。

#### ◆コーディネーターより

中橋さん：子育て支援について「教えて」ではなく能動的になってほしい。地域子育て支援拠点は今、自分たちの暮らしている地域で、子育てしている人たちが作ってきた。 国の制度ができたから、私たちのところにやってくるのではない、当事者に一番近いみなさんが声をあげていき、市町村事業としてアプローチしていくことが大切だと思う。